

今月のみことば 2026年8月

わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。

(ヨハネの福音書11章25節)

「死の悲しみ」の答えはどこに

8月に入り、お盆が近づいています。多くの方が故郷に帰り、お墓参りをして、先に旅立たれた大切なご家族に思いを馳せる時期ではないでしょうか。普段は忙しく過ごしていても、この時期ばかりは立ち止まって、人の死や命について、静かに向き合うこととなります。

「ひとがしんじょうって、かなしいことだとおもったんだー。」

曾祖母のお墓を訪れた数日後、3歳の息子が独り言のようにボソツと言いました。幼い子どもの実感が、正直なことばの中にこもっているのを感じました。人はこんなに早くから、死を悲しむ思いを共有しているのだということに、驚きを感じた経験でした。

死別の悲しみ。それは、小さな子どもだけでなく、どれだけ大人になっても、共通の悲しみです。私たちは年を重ねるにつれ、懸命に耐えたり、あるいは、心に折り合いをつけようとします。

しかしながら、誰もが死の問題に対して、本当の解決を見出せてはいないのではないのでしょうか。

この、人間にはどうすることもできない「死の悲しみ」に対して、正面から解決を宣言されたのが、イエス・キリストです。大切な身内を亡くして涙を流している遺族の前に立ち、こう言われました。

「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」

つまり、イエス・キリストは命に溢れておられ、ご自身を信じる者は、死を越えて生きていくことができるのだ、と大胆に宣言されたのです。

こういふことを言う人がいれば、まず怪しいと疑うべきでしょう。たわごとを言っているか、あるいは、単なる気休めか。しかし私は、このことばを信じます。イエスご自身が、命を落とし、そこから本当に復活されたからです。歴史上すべての人を呑み込んできた「死」に対して、キリストだけは勝利されたのです。もし、そんな方が、「死は終わりではない」と約束しておられるとすれば、その約束こそ、私たちが安心して信頼するに足る、確かな拠り所になるのではないのでしょうか。

幼子から大人まで、私たち全員が生涯にわたって抱え続ける「死の悲しみ」に、聖書は正面から答えを出しています。お盆という、命の行く末を考えるこの季節に、死を乗り越える救いについて、一度聖書から真剣に聴いてみませんか。(H)

